



※「おはなし定期便」は、子どもたちへの「読み聞かせ」や「朝の読書」の時間などに活用ください。

たまたまタヌキ

内田 麟太郎
うちだ りんたろう

ただ広いだけの原っぱ。かれ木にカラスが「羽、とまつてい

るだけです。」

「ああ、つまんねえ、つまんねえ」

キツネは、大げさにあくびをしました。いいえ、あくびをしかけ、

「へっ」

と、とび下がりました。目の前にくたんとびていたヒキガエルが、ひよいと立ち上がったかとおもうと……。竹の子になったからです。

それは、おとこのことでした。

それからずっと、キツネはやぶにひそみ、竹の子をにらんでいました。ときどきひからびたネズミをしゃぶりながら。すると、きのうのひるになり、竹の子はいきなり、

そらみたことかと そらみれば

と歌い出し……。ぬるりとタヌキになりました。

「ひっ」

キツネは、ひめいといつしよに立ち上がり、ふにやりとくずれました。腰が立ちません。

タヌキも、おなじ思いのようでした。

「おれは、いったいなに者なのだ。四日前は、東京のビルで、社長のいすにかけていた。たしか、社員は二千人ほどいたはずだが」

(すげえ)

キツネは目をしばたきました。タヌキも、いくらかふんぞりかえっているようです。

「で、その前の日は、ジャンボ機のパイロットで……。その前はメジャーのピッチャーで……。その前は、なんだつたかのう」

タヌキは、あまりにもくると変わりました。それを思い出せないのでした。

「うーん」

腕組みしているタヌキに、かれ木の上から、カラスがあっさりいきました。

「犬のうんち」

「そ、そうだ。犬のうんちだった」

タヌキはなにがうれしいのか、手をたたきました。だが、すぐにまゆをしかめ、ぶちっと草をむしりました。

「だとすると、ますますわからん。おれはなににでも化けられるタヌキなのか。それともなにものかが、たまたまタヌキに化けている、たまたまタヌキなのか」

タヌキはむつかしい顔で遠くを見ました。どこから見てもナヤメル哲学者です。

そんなタヌキにむかつて、カラスが重々しくいきました。

「そのとおりだ。おぬしはタヌキなどというけちな動物ではない。おぬしは、タマシイなのだ。世界の大物になろうと、変化をつづけているタマシイだ。そして、たぶん……」

カラスはそこで口をつぐみ、はつたとタヌキの目を見すえ



あべ 弘士／絵

そんなキツネには目もくれず、タヌキはゆるりと石に腰をおろし、ひとりごとをいはいはじめました。

「おれは、まことにタヌキであろうか。それとも……」

そこで、タヌキは鼻をひくつかせました。

「けっ、タヌキくせえ」

どうやらタヌキは自分がタヌキなのが、気に入っていないようです。さらにタヌキはつぶやきました。

「おれは、タヌキにしては、かしこすぎるところがある。生まれつきかもしれないが……」

「ぶっ」

キツネはおもわずふき出しました。でも、すぐに「まてよ」と、真顔にもどりました。たしかに、タヌキが化けるのは、キツネもたびたび聞いています。

しかし、ヒキガエルが竹の子に化け、その竹の子がタヌキに化けたとなると……。わけがわかりません。

ただ、竹の子がタヌキに化けただけなら、竹の子に化けていたタヌキが、もとのすがたにもどつたのだといえるでしょうが。



ました。キツネもおもわずやぶから立ち上がりました。

「た、たぶんとは、なんだ？」

タヌキもすこし足がふるえています。

「たぶん、おぬしは、今日、世界」の大物になる」

「せ、世界」……」

「さよう、世界」の」

タヌキは、やっぱりそうであったかというように、深々とうなずきました。ほほにうかぶかすかなほほえみ。すでにそのものになったような満足顔です。

「しかし」

その満足顔に、カラスが冷水をぶっかけました。

「し、しかし、なんだ？」

タヌキは、あわててカラスを見上げました。

「おぬしには、まだまだよいがある。こころのどこかで、おれはもしかしたらタヌキではないかと、うたがっている。その弱いところが、世界」の大物になることを、じゃまをしておる！ 大声でさけべ！ タヌキは大ばかだ、と」

「わ、わかった。お、おれは、けちなタヌキなどではない。

おれは、さけぶぞ！」

タヌキはすつくと立ち上がり、腹のそこから声をしぼり出しました。

「タヌキは、大ばかだ——」

山々にこだましていく腹からのさけび。タヌキはおもむろに胸をぞらし、腰に両手をあてました。どうして、どうして、たいしたすがたです。キツネの目にも、タヌキは、たまたまタヌキにちがいないと、おもえてきました。

「なつたぞ！ おぬし！」

カラスが、さけびました。

「な、なりましたか！」

タヌキはどんぐり目をいつそう大きくしました。

「みごとじゃ。おぬしに、もう、まよいはない。おぬしは、たまたまタヌキなのだ。あとは、ひたすら大物になれ！」

「どうすればなれます、先生」

タヌキは、おもわずカラスを先生とよんでいました。

「目をつぶり、思うのじゃ。大物を。そして、化けるのではなく、そのものになりきるのじゃ」

「な、なりきるのですね」

「そうじゃ。二度と、ちがうものなどに化けるな」

タヌキは目をつぶり、世界」の大物を思いづけました。

（太くて、重くて、堂々として……。なんだか、わからんけど、ともかく、世界」大きいものだ）

タヌキは、ゆつくり大どんぶりになつていきました。ビルよりもでっかい大どんぶりです。

ぽかーん。

あんぐりと口を開けているキツネに、カラスがにやりといいました。

「おぬしも、たまたまキツネかい？」



内田 麟太郎（うちだ りんたろう）

絵詞作家。一九四一年福岡県生まれ。「うそつきのおき」（文芸堂）で小学館児童出版文化賞、「がたごがた」（童心社）で日本絵本賞受賞。近著「うまれてきたんだよ」（解放出版社、狂言絵本「かたごもり」（ポプラ社）ほか著書多数。